

大正大学外部評価報告書

(本年度の課題)

外部評価委員会（以下、本委員会）の任務は、「自己点検・評価報告書」またはその他の事項に基づいて第三者の立場からこれを評価し、大正大学の教育・研究水準の向上及び組織の活性化に資する提言を行うことにあります。昨年度は大学基準協会に申請する「自己点検・評価報告書」及び「第3次中期マスタープランM I G s 2026」（2018（平成30）年）以下、「魅力化構想」）に対する提言を行いました。本年度はこれに引き続いて「魅力化構想」の進捗状況及び自己点検・評価のその後の取り組み等について各委員が独自の視点から評価し、提言を行いました。

(本委員会の活動)

本委員会は大学主催の第1回の全体会議において、「魅力化構想」の概要と大学の取り組みについて、また、「魅力化構想」具体的化のための各プロジェクト・チームの取り組みについて報告を受けて質疑応答を行いました。その後、外部評価委員相互による打ち合わせの会議で意見交換を行い、最終的に第2回の全体会議において提言内容について報告及び質疑応答を行いました。

(本委員会の評価と提言)

1. 「魅力化構想」について

①地域戦略人材の育成

2009（平成21）年度から始まった中長期事業計画は、「第2次中期マスタープラン」（2014（平成26）年度）を経て、今次の「魅力化構想」が策定されました。大学改革の取り組みは創立100周年を迎える2026年に向けて継続的に努力が続けられています。こうした積み重ねの中で「新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業」が文部科学省令和2年度大学教育再生戦略推進費「知識集約型社会を支える人材育成事業」に採択されたことは高く評価できます。地域戦略人材の育成、アントレプレナーシップ養成等を推進するために必要なステップとして成果を大いに期待しています。今次の「魅力化構想」では人材育成の目標が地域戦略人材の育成にあることが明らかにされました。人材育成の具体的な目標がアントレプレナーシップの養成と起業家のどちらに焦点置かれているのか明らかではないとの意見もあり、今後はこの点を踏まえて目標(KGI)と検証指標(KPI)を設定し、PDCAサイクルを回した取り組み行っていくことを期待します。

②「5INNOVATES」と8つのプロジェクト

「5INNOVATES」に基づいて具体化された「魅力化構想」では、スマートユニバーシティを目指す情報基盤整備、超スマート社会を迎える中での働き方改革、経営基盤の確立に向けた戦略的経営・財務、地域人主義を掲げる大学としての地域戦略（構想）、その具体化のひとつであるすがもプロジェクトA・B（実装）、これらをサポートするDAC（推進）のほか、大学院（改革）、就職（向上）の8つの事業が、学内組織や事務局の部局を超えた横断的な

プロジェクト・チーム方式によって推進されています。これらの事業内容はそれぞれ目指す大学のビジョン実現に不可欠である重要な課題を担っています。各プロジェクトには 10 項目の目標が設定されて事業推進の具体化のプロセスが可視化されています。これらのプロジェクトは学内組織や事務局の部局を超えたプロジェクト・チーム方式による取り組みが行われることにより「魅力化構想」の全学的な認識を深めることにも役立つと思われます。

③プロジェクトの進捗状況

8つのプロジェクトの進捗状況については、キャンパス全域における安定した Wi-Fi 環境の改善が進められ、またコロナ禍に対応して Zoom や Teams をはじめとする授業のオンライン化に対応した情報基盤整備も進められました。教育サポートシステムである DAC e ポートフォリオも、社会創造系学部 1 年生から導入が始まるなど、スマートユニバーシティの基盤となる教育・学修の情報基盤整備であり、取り組みが高く評価されます。昨年設立された総合学修支援機構 DAC において、基礎学力育成による高校から大学への円滑な移行支援、チュートリアル教育による学生一人ひとりの 4 年間の学修支援、卒業後の社会人としてのコミュニケーション力育成など、全学的に順調に本格稼働しています。8 号館（図書館、総合学修支援機構 DAC）が予定通り新設されたことは評価されます。DAC の整備も進展しています。他方で、ラーニングコモンズを含めた多様な機能を有した図書館を目指したのですが、豪華な自習室、伝統的な図書館が新設された印象も受けました。今年はコロナ禍で使用制限が大きかったことも鑑みて、次年度以降、使い方の工夫を凝らして DP（ディプロマ・ポリシー）に基づく学生の学修充実に繋がることを期待します。この他、地域と大学の協働による巣鴨の地での教育を展開するすかもプロジェクト B（学生を中心としたプロジェクト）も一定の前進があったものと評価できます。

④提言

「魅力化構想」を推進するために今年度には総合政策会議が設置され、教職が協力する体制が構築されましたが、一方で理事会・常務理事会の役割が曖昧となる恐れがあります。ガバナンス体制を明確にするためにガバナンス・コードを作成することが必要です。また、通常業務に加え戦略的な事業計画の推進に全学的に取り組む際には担当する業務のバランスをどう調整するかについても配慮が求められます。

「5INNOVATES」に基づく 8 つの事業プロジェクトについて報告を受けましたが、事業の進捗状況や投資に対する成果を評価するためには「目標と成果の見える化」が重要です。KPI を設定して「魅力化構想」と本学のマネジメントの根幹である TSR マネジメントの連動した取り組みを行うことを期待します。

「魅力化構想」を実現するためには、これを支える財務計画が重要な役割を果たします。そのためには財務的指標としての中長期財務予算の作成が求められます。一方、財務の機動性を確保するには理事長裁量経費や学校裁量経費を別途予算化することも有効です。

2. 自己点検・評価活動について

①教育課程・学習成果

『TSR マネジメント報告会』の資料を受けて、学部・研究科では、大正大学の全学的な教育理念、DP・CPに基づく内部質保証に積極的に取り組んでいる点は評価できます。一方、大学のガバナンスが学部・研究科に対してどのように機能しているかが見えにくいという問題を感じます。全学の推進視点から見て、学部・研究科の取り組みに時に“No”を言えるガバナンス体制となっていることが重要です。

魅力化構想など大学から報告された全学的推進は、学部・研究科に深く関わらず、全学で取り組める内容に終始したものとも見えます。次年度の報告では、大学執行部と学部・研究科との相互評議のプロセスをもう少し詳細に報告していただくことを期待します。加えて、「魅力化構想」をはじめとする全学的推進が、学部・研究科のDPや学修成果にどのように結びついているかを示すデータの収集及び本委員会への報告を望みます。

昨年度の外部評価でコメントした学部・研究科における講義科目におけるアクティブラーニング型授業の推進率が示されたことは評価されます。次年度ではアクティブラーニング型授業の定義を確認し、学部別に達成目標となる年次のKPIを定めるなどの改善を行い、アクティブラーニング型授業のさらなる推進(理想的には100%に近づける)を期待します。

②学生支援

学生支援に関連する項目に関しては、総合学習支援機構DACを設立し予定通り進捗しています。評価指標として活用できると思われるデータを抽出してみると、令和元年度の中途退学率は対前年度比で0.2ポイント改善し、就職希望者の就職率は1.9ポイント向上し、卒業生の教育内容への満足度も高めの評価を得ています。チューターの人数が目標に達しておらず、就職先への満足度が高いとは言えない、などの課題もありますが、全般的には、着実に学生支援は前進していると評価できます。

③SDGs

SDGs全体を貫くテーマの一つとされているゴール5(ジェンダー平等)について評価を試みました。大正大学は学部学生の女性比率は全体平均及び私立平均を上回っています。ただし、学部教員の女性比率は全体平均及び私立平均を下回っており、この点は課題と考えられます。

以上